



カラスの羽は黒



greentea0117



あるところにカラスがいた。黒い羽で嫌われ者だった。嫌われ者上等と思っていた。好かれたって、何かと面倒なだけ。カラスは巣を作るものを探していた。針金でもビニールでも何でもよかった。それらを寄せ集めて巣を作るとぬくぬくと居心地よくすごした。

カラスはなんでも食べた。腐ったものを食べても腹をこわさない。それにカラス自身は自分の黒い羽をきれいだと思っていた。カラスは満足だった。

そこへある日白いハトが現れた。白いハトはカラスのことも誰のことも気にとめず、こっこと歩いていた。白いハトの羽はやっぱり美しかった。けれど自分も負けてはいないとカラスは羽を伸ばしてみてもはしげしげと眺めた。

白いハトは、誰のことも気にとめないというところで、カラスに似ていた。が、カラスの図太さは持ち合わせておらず、日に日にやせ細っていった。ネズミも人間も犬もキジも白いハトのことを心配した。食べ物をもたらえたおかげで、ハトはまたふくふくとこえだした。

ある日白いハトはカラスの巣をたずねた。うわさには聞いていたが、汚い巣だった。針金がとびでて、他にもわけのわからないものでぐちゃぐちゃだった。

「私をあなたの弟子にしてほしいんです」

白いハトは言った。

「弟子？」

一体どうしてそんな言葉を思いついたのだろうかとかラスはいぶかった。今はもうそんな言葉は使わない。

「俺の弟子？ になってどうすんの？」

「少しはあなたの狡猾さを学んだほうがいいと言われました」

「狡猾？」

カラスは自分が狡猾とは思ったことはなかった。

「狡猾ねえ」

カラスは言った。白いハトはおじけづくでもなく、カラスの巣のはしにとまっている。

「別にいいんじゃないの。あんた、食うには困らんわけでしょ」

「でもいつまでもほかを頼るわけにはいかないし」

「前から思ってたんだけど、なんで自分で食べ物探さないわけ？ いくらでもあるでしょ、人間が落としたものとか」

「実は私、飼われてたんです」

「はあ？」

飼われてたという言葉がカラスが理解するまで数十秒かかった。

「飼われてたって人間に？」

「そう」

「ハトも人間に飼われたりするの？」

「私は飼われてました。物心ついたころから鳥かごの中にいました。そこでちょっとずつ大きくなったんです」

「ふーん。それでどうしてまた外に出ちゃったわけ？」

「ある時、かごの扉が開いてたんです。飼い主がうっかり閉め忘れたんです。私は絶好のチャンスと思って、外に出ました。でもすぐ怖くなって戻ろうとしました」

「うん、戻るべきだったと思うぜ、おれは」

「でも、どうしてだか私は戻りませんでした。でも今でも飼い主の顔がちらついて、ほんとにこれでよかったのだろうかと思います。飼い主はわたしにとってもよくしてくれました」

「でも、まあそれはあんたの自由といえそうだし」

「そうですね。とにかく自分で決めたのだし生きていかなくちゃだめです。そうですね？」

「さあ、わからんよ、そんなこと。うん、よくわからねえ。えさなら、あの青い屋根の家のごみがいい。うん、あそこのごみはけっこう贅沢で、パンの耳とか、野菜とか、充分食べられるものが出されるからな。毎週木曜日だぜ、ごみの日は。だからその日の夜あたりを狙う。でも袋に穴を開けると、あまり大きくしちゃいけねえ。動物がごみを荒らしまわっているのを知ったら、人間は何をするかわかったもんじゃない。ほんと人間てやつは自分勝手に、自分たち以外の動物のことを……いや、すっかりぐちっぽくなった。けどあんた今言ったこと一人でできるかねえ？」

人間にさとられないようにごみをかっさうことが」

「わけないと思います」

白いハトは言った。

「袋を少しだけつついて食べ物を失敬すればいいんですよ。とてもいいことを教えてもらいました。これで私は野でも生きていけるような心持ちがします。本当にありがとう」

「ふん、おれはどこに行ってもこの黒い羽のせいかわれ者さ。礼をいわれたことなんか生まれて一度もない。だからなんていうかこう、嫌な気持ちのものだな。そわそわして、おちつかない。おまえさんも少し自信がついたのならもうおれを一人にしておいてくれ」

白いハトは言われたとおりに、さっさとカラスの巣を後にした。

「生きてりゃ妙なことがあるもんだ。それにしてもハトの羽の白いこと！ あれだけ白かったら目立ってまた人間につかまっちゃうんじゃないか。ま、その方がやつにとっちゃいいのかもしれないが」

カラスはしばらく考えていた。

「それにしても、やつにはいつもめんどろをみてくれてた人間がいるのだろう。そいつをおきざりにしてかごをぬけだすなんて、ちょっと不人情じゃないだろうか？ ま、あいつ野でうまく暮らしていけるとは思えないし、すぐもとのかごに戻るのが関の山だな」

それからカラスはぱっさぱっさと飛び立った。そろそろ夕食の時間だ。

夕食後カラスが巣でくつろいでいるとまた白いハトがやってきた。

「またおまえか！ あのなあ、おれは一人で暮らすのが好きなんだよ。師弟関係なんてまっぴら

ごめんだ」

カラスの羽は黒

「そうじゃないんです。言われたとおりがみ袋にちよっぴり穴を開けてくちばしをつっこみたらふく食べました。あんまりおいしいとは言いかねるけど、ぜいたくは言えないです」

「ふーん、じゃあなんの用？」

「今日、ここに泊ってもいいですか？ いつも人の気配を感じて眠っていたので、一人だと眠れないんです」

「おいおいおい」

カラスは天を仰いだ。

「眠れないって生まれたてのひよっこじゃないんだぞ。おまえよくそんな恥ずかしいことが言えるな」

カラスがそう言っている間にも白いハトは、カラスの巣の片隅を何とか整えて、自分の居場所を作った。

「一晩だけ。あとはどうにかします」

そう言って、あっという間に眠ってしまった。

「こいつ弱そうに見えて案外図太いな。こういうのを怖いもの知らずっていうんだらうか」

カラスとしてはハトを巣からたたきおとしたい気持ちだったが、ハトがあまりにも堂々と安らかに眠っているので、怒るのもばからしくなり、なるべくきぎゅうぎゅうと自分のスペースを広くとって眠った。

次の朝、起きてみるとハトはいなくなっていた。カラスは心からほっとした。あとには白い白い羽毛が一つ、巣のはしにひっかかっていた。カラスは風に揺れる羽毛を見ながら、

「あいつは人間の元に帰っただらうか。野で生きていけるとはとても思えん。あいつが生きていけるほど外は甘くないしな」

そして空へ羽ばたいた。ちらちらと下を見下ろし、何か白いものが見えないかちょっと気にしていたが、すぐに忘れてしまった。

白いハトの方も、自分が人間に飼われていたことを忘れた。羽はよごれ灰色になったが全然気づかなかった。ある時、えさを探し公園に入るとたくさんのハトがこっこと歩いていた。

「自分に似た鳥がいる！」

白いハトが近づいていっても、ハトたちは気にもとめなかった。

「しばらくここですごそう」

白いハトは思った。白いハトはそこで何年もすごした。巣を作って卵を産み、子供を育てた。すっかりふつうのハトになったころ、ふと黒い鳥が空をとんでいるのをみつけた。

「やあカラスだ」

だれかが言った。

「あいつがこのあたりをうろつくと厄介だなあ」

「あれ、カラスっていうのか？」

「はあ、カラスを知らない奴なんているのか？」

カラスの羽は黒

白いハトは黙ってカラスをながめた。カラスは下降し、少し離れた木にとまった。つやつやと黒光りする羽を白いハトは知っていた。

「あーあ、しばらくいつく気かもしれないな」

だれかが言った。白いハトは聞いたかった。お前は誰だ？

それで周りが寝静まったある晩、白いハトはカラスのところへ出かけた。

「起きてるかい？」

白いハトは言った。

「ん？ なんだお前」

カラスはくわっとくちばしを開けた。白いハトはとびすさった。

「何の用だ、おれに」

「変なことを聞くけど」

白いハトは言った。

「私を見たことはない？」

「ん？」

カラスは目をこらした。

「ああ、公園にいるハトだろ」

「そうだけど」

白いハトは言った。カラスは首をかしげた。

「で、なんだ？」

「自分でもよくわからないんだけど、あんたに見覚えがある気がしてさ」

「そりゃあるだろ。カラスなんてどこにでもいる」

「そうだけど」

カラスは首をかしげた。

「あんた変なハトだな。そういえば昔いたな、変なハトが。真白なハトだった。人間に飼われてたんだと。おれに弟子入りしたいなんて言ってきて」

「変なハトだな」

「すっかり忘れてたけど、どうなったかな」

「人間に飼われてたんじゃ、きびしいかも」

「ああ」

カラスは何か物思いにふけていたが、

「あんたも珍しいね。おれは誰かに話しかけられるなんざ、本当に久しぶりだ。たいてい、『このどろぼー！、』『しっしっ』、『なんかやだね』、くらいのもものだからな」

「そうみたいですね」

「うん」

「じゃ、私は帰ります」

「ハトってけっこう気まぐれなんだな」

カラスは首をふりふり言った。